

研究助成（2009 年度募集）研究実績報告書

代表研究者	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 特任准教授 八木 絵香
研究テーマ	事故当事者が「第三者的視点」を獲得するということ - 多角的・重層的に、事故の検証や被害者の回復に取り組む -

< 助成研究の要旨 >

安全・安心な社会を実現するためには、事故の記憶を、事故当事者のみならず、直接的には事故に接した経験を持たない人々も含めた社会で共有し、社会の安全・安心にかかる普遍的な仕組みへつなげて行くことが不可欠である。そのためには不幸にも発生してしまった事故を、事故当事者自らが、当事者としての視点だけでなく、事故から一定の距離感を保ちつつ第三者的に（客観的に）とらえ直すことが肝要である。本研究では、公共交通の事故当事者が、自らの経験を冷静に振り返り、第三者的視点を獲得し、改めて事故の経験を語ることは可能か。それはどのような言葉で表現されるのか。第三者的視点を獲得するに至るプロセスとはどのようなものか、について種々の対話における発言分析（質的分析）による検討を行った。具体的には下記の通りである。

【1】自らの事故と他分野の事故を振り返る「対話の場」の形成

本研究では、「公共交通（JR 西日本福知山線脱線転覆事故）」以外に、他事故・災害（他鉄道事故、航空機事故、エレベータ事故）事故当事者も交えた「対話の場」を形成した。また、公共交通災害の負傷者支援に焦点を当て、地下鉄サリン事件被害者の支援を行う NPO 法人との対話の機会を設けた。

この対話の場で JR 福知山線の事故当事者（主に負傷者とその家族）は、自らの事故についてのみならず、他事故・災害にも関心を向けつつ、被害者が事故調査等に関与することの意義や、事故調査機関の在り方、被害者支援の在り方等について議論を深めた。

【2】事故当事者が獲得する第三者的視点の分析

【1】の対話を通じて、それぞれの事故当事者が、自らの事故をどのように捉え直したかについて事後インタビューを実施した。その上で、事故当事者が獲得する第三者的視点について分析を行った。また事故当事者主体のさまざまな活動の場での事故当事者の振る舞いや発言を質的に分析し、事故の当事者がどのようなプロセスを経て第三者的視点を獲得したかについて検討を行った。

【3】第三者的視点の公開とその社会的影響の評価

分析した内容は、第三者的視点獲得した事故当事者の言葉として、整理した。これらの分析もふまえて、さまざまな事故災害の被害者が一堂に介した座談会を一般公開で実施した。研究代表者はその場でファシリテーターをつとめ、これらの事故当事者の言葉に対して、事故当事者以外の人々がどのように受け止めるかについても検討を加えた。

また、検討結果からは、事故当事者が第三者的視点を獲得するためには、下記のようなプロセス、要素が不可欠であることが推測されている。

1. 「理解できない」から始まる対話
2. 個人の想いとその相対的解釈（遺族と負傷者と負傷者の家族、負傷者間「格差」、直接的被害者と間接的被害者）
3. 他事故、災害被害者との対話・視点の交錯
4. あくまでも「個」としての体験から語り・一般化への禁忌
5. その結果としての第三者的視点と社会活動（日々の生活の延長として）

事故当事者個々人の活動および本研究による活動を通じて、JR 西日本福知山線脱線転覆事故の事故当事者の中には、事故当事者としての個を超えて、その経験を客体化した上で、公的に発言する「市民層」が顕在化しつつある。またその他の公共交通事故、災害においても同様の傾向が確認されつつある。これらの市民層は、自らの事故のみならず、他事故・災害についても強い関心を持ち、安心・安全な社会づくり、特に被害者視点からの安心・安全な社会作りのための主体的集団となりつつある。

これらの集団の形成は、多様な事故・災害当事者のネットワークにより、より具体的な対処方策や解決方策などについての「知」が共有されることを意味しており、事故当事者自身の心身の回復に寄与するばかりでなく、自らの事故を客観的に見つめ直すプロセスともなっている。これらの内容やプロセスについて記述することは、JR 西日本福知山線脱線転覆事故当事者自身のみならず、社会全体にとっての公共交通の広義の安全性確保に寄与するものであると考えられる。